

岡野工業株式会社代表社員

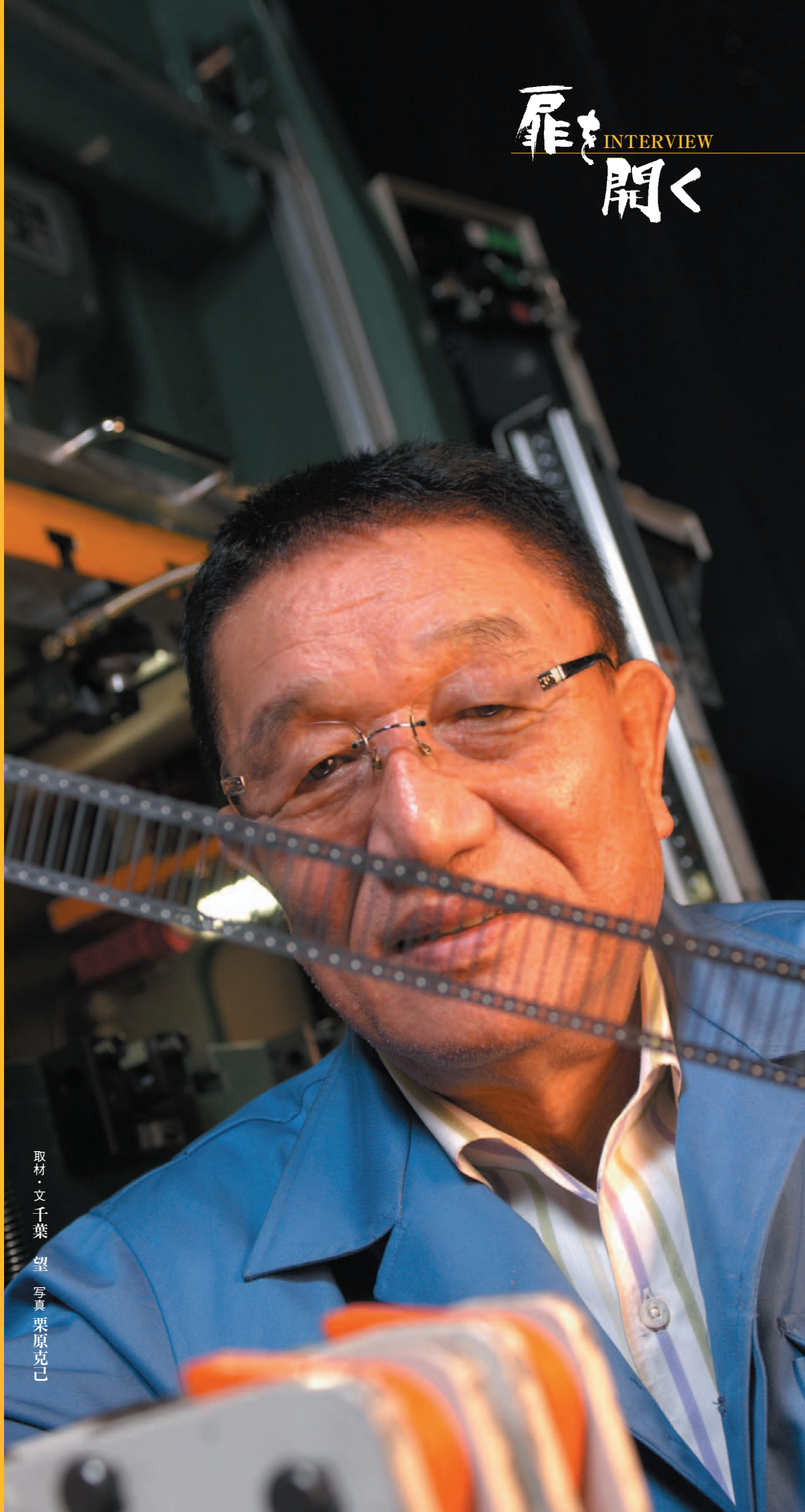
岡野雅行

Masayuki Okano

子供の時から、人と違うことがやりたかった。そんな個性を日本社会の中で損なうことなく、ものづくりの世界で開花させた岡野雅行氏。

従業員数六名ながら、人がやりたがらない難しい仕事を実現していく力を認められて、「世界一の町工場」の異名を取るまでになった。個性重視のほすが、どこか子供を型にはめたり、大人たちを息苦しくさせがちな現代にあって、豪快でさわやかな風を運んでくる岡野氏。落語家の噺^{はなし}を思わせる活きのよい岡野氏の話しぶりを、どうぞお楽しみください。

取材・文千葉 望 写真 栗原克己



「人がやらないからこそ燃える」

「玉ノ井」が俺の学校だった

——「世界一の町工場」の異名を取る岡野工業さんにお邪魔しました。本当に下町らしい場所にあるんですね。

岡野 そうよ。戦争が終わったとき、俺は一歳だったかな。そこら中が焼け野原で、ここから浅草の松屋が見えちゃうんだもの。富士山だって見えた。ここらへんも昭和二十年三月十日の東京大空襲で焼かれてね。俺んちは疎開しなかったから、もろに当たっちゃった。さんざん空襲に遭って、もう怖いという感覚なんて麻痺しちゃってるから、燃え盛る炎を見て「畜産だなあ」って見上げてたよ。

戦後はここらにも進駐軍がきたんだよ。なぜかって、ほら、ここからすぐのところに玉ノ井があるだろう？ あそこは赤線があったからさ。もともとここらは戦前、今でいうなら六本木、歌舞伎町みたいなもの、不夜城だったの。ち

よっと向こうの通りは一大遊郭だからね。永井荷風なんか読んでもらえると分かるんだけどね。その隣は向島の花柳界、芸者がたくさんいて、これまたすごいわけだよ。

俺はそういうところで育ったわけ。で、通った小学校が更正小学校。ひどい名前だろ。何も悪いことしてないのに、なんで更正しろなんて言われなきゃいけない。そんな名前の学校があるか（笑）。孫がかわいそうで、名前を変えろって、随分俺も文句を言ったよ。三年くらい前にやっと名前が変わったけどね。実はそばに更正橋という橋があって、遊郭地帯の女の子たちに「悪いことしないで、早く更正しなさい」ってな教えを垂れてたんじゃないかと思うわけだ。

ま、俺も早くから玉ノ井界隈には出入りしてたんだよ。そもそも学校なんて大嫌いだったからね。

すぐにそっちに遊びに行っちゃう。その客に混じって俺たちガキ大将も将棋を教わったり碁を教わったりしながら遊んだわけだな。ぶん殴られながらもお使いしたり。お姐さんたちのお使いもよくやったよ、せっけん買ってこいのなんなのって、金を預けられるんだけど、お釣りはそのままもらえるんだ。だから俺、物心ついてから親に小遣いもらったことない。いつもお金は満タンだよ。

世渡り学はそこで習っちゃったわけだよ、若いというか、餓鬼の

「金型屋」からの脱却が転機になった

——お父様が金型工場を経営なさっていたんですね。

岡野 そう。オヤジは真面目な男でね。遊びに誘われても断っちゃうような男だった。だんだんつきあいが狭くなる。でも、腕は良いから仕事は来るんだが、こんなこっちゃダメだと思ってた。どうも

うちに。なるほど、お得意さんとの付き合いはこうやってやんなきゃいけないんだなということが身に染みて分かったよね。そうやって毎晩うちへ帰ってくるのは二時、三時。

——それじゃあ楽しくって、学校には行けませんね。大人つても見えるだろうし。

岡野 そういうこと。だから今の子はいわゆるうざだな。うちへ帰ると、みんなゲームばっかりだろ。これじゃ人間、バカになっちゃうよ。

自分の父親が真面目だと、せがれは柔らかなのができるね。親父が柔らかいとせがれはまじめなのができる。これ、ほんとだよ。

とにかく俺は悪かったから、親に「早く籍抜いて出て行ってくれ」って言われてたんだから（笑）。おふくろにも言われたもん。「お

2点とも、墨田区にある岡野工業。一見、どこにでもあるような町工場の建物だが、中ではテルモの注射針など、よそでは作れない製品の数々が生み出されている。



まえ、何やってもいいから、人殺しとかっぱらいだけはしないくれ」って。そんな感じですよ。うちの女房に聞けばよく分かる。

ま、俺は昔っからどっか変わったところがあつたんだろうな。だけど、人がやらないことをやんなかったら、俺なんて世の中のドロップアウトの人間になっちゃう。

学歴はないし、地位や人脈は何もないんだから、普通のことをやってたってどうにもならない。親父みたいに真面目にやるだけでもダメ。ぶん殴られつつ親父に金型づくりを教わりながらそこを考えるところから、俺の仕事人生は始まったようなもんだ。

——岡野代表は金型だけにとどまらず、その先のプレスにまで進んでいかれたんですね。

岡野 そう。うちで金型を作ってた、ライターとか口紅ケースなんかをどんどんこさえてたんだけど、うちの金型を使って仕事をしているプレス屋さんのほうがずっともうけてるってことに気がついたんだ。いい金型を作ってたてるのはうちのなに、どうもあいつらのほうがもうけてるのはおもし

ろくねえ(笑)。

なんでかというのと、俺がいいものを作るでしょう。そうするとプレス屋のおやじがぶぐやてんぶらをご馳走してくれるわけ。「なんだこいつらは、もうかつてんだな」って思っていたわけよ。こっちは二輪車に乗っているときにあつちは四輪車。

だから俺は自分でもプレスをやりたいと思った。そうすれば直接大メーカーとだって仕事ができるかもしれない。だけど親父がやらしてくれないんだ。干されちゃうからね。俺はその頃そんな仕組みが分からなくて、どうにもしようがなくて、親父に頼んで工場の仕事が終わった後に、場所を借りて自分で半端仕事をもらってきてはやってたんだ。

——それをお父様は許してくださいっただけですか。

岡野 いや、大反対。だけどおふくろがとりなしてくれてね。「どうせあいつは三日で飽きる」だって(笑)。何しろ俺は幼稚園も三日で中退し

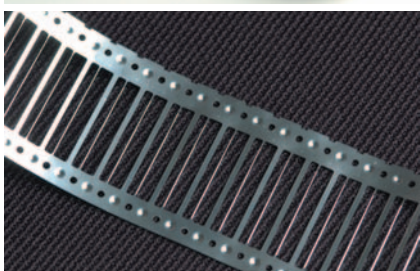
た前科があるからさ。当時はこらで幼稚園に通う子供なんて少なかったんだよ。そ、お坊ちゃまっでわけさ。それなのに幼稚園が耐えられなくて、三日でパー。

だけどこのときは飽きなかった。毎晩三時まで働くことを一〇年間続けたもんだから、目の下がクマで真っ黒になったんだよ。そんな俺を見て、ある会社の支店長が日立電線に紹介状を書いてくれたの。

それを持って土浦にある工場の工場長に会いに行った。ちやうど日立電線も銅を加工して納めるだけじゃなく、付加価値を付けて製品化したいと思っているところだったんだね。俺と考えることは一緒だよ。俺もプレス屋には恨みがあるからさ。「いいことだ、どんなやろう」ってことになったん

だ。で、おかげさまで図面を頂いて、最初にやったのが自動車のラジエーターに今でも入っているサーモスタット(温度センサー)の冷間鍛造。うまく行って、喜ばれて、どんどん仕事が増えていったんだ。

こういう仕事をしてみると、実によく時代が見えてきた。このままで行ったらプレス屋だって今までのようにはいなくなるぞ、と。メーカーで製品にしちゃうんだから。農家の人が小豆をこさえたら、そのまんま羊羹までこさえちゃうようなもんだ。それも虎屋よりうまい羊羹だ。そういう時代なんだよ。これはもう大変な時代が来るぞ、俺の時代だぞ、と思ったね。おかげでもうけさせていたたいて、車もいいのが買えるようになった。



上／一枚の金属板からプレスで作られるご自慢の鈴。「どうやってこしらえたか、当てたら偉い」のだそう。中／これが注目の注射針。中央の階段状のうち、細いほうが針となる。下／岡野代表が勉強のため購入したドイツの本。図を参考にする。

台湾で家庭人として「更正」して帰国

—— だけど、そこにどまらなかつたわけでしょう？

岡野 そうだよ。何しろ一九六七年から一九八五年まではこの業界のどこでも景気が良かったから、みんな贅沢になっちゃって安い仕事なんてやらないんだ。これじゃあダメだと思ったのがミツミ電機。台湾に工場を出そうと考えたんだ。そしたら「岡野さん、誰もやってくれないからこの仕事をやってくれないか」って言われてね。「みんなが安くてやらないもの、俺だってやりたかねえ」って断ったんだけど、俺もひらめいたんだな。それなら完全自動機にすればいい。それを自分で作ればいい。数年後、台湾に進出する時には自動機を買ってもらえば俺もわかるから、

そういう契約にでもなった。

それで台湾にも行ったんだよ。その当時の台湾といえば、日本の男にとってはまあ天国みたいなところだな。「岡野さんなんか行ったらもう日本に帰ってこないよ」なんて、女房に吹き込むヤツがいたぐらい。ところが違ったんだな。そりゃ、遊んでいたヤツもいたよ。真面目だった人間ほど狂っちゃったりしてな。ところがこっちは玉ノ井で鍛えてる。台湾の人たちが奥さん連れてホテルのディナーショーに来ていたり、庶民だって家族一緒に屋台で食事を楽しんでいたりするのを見て、かえって考えさせられちゃったんだ。俺、女房をホテルのディナーショーに連れてったことなんかあるだろうか、

って。帰国してすぐに女房をディナーショーに連れて行ったんだよ。思いがけず、俺も「更正」し

人がやらないことにこそ燃える

ちゃった（笑）。女房は「お父さん、一体どうしたの」って気味悪がっていたけど。

—— 人のやらないことをやって、

とうとうテルモの注射針という大ヒット作を生み出されました。

岡野 細くて痛くない注射針ね。

これはもともと、糖尿病でしょっちゅう自分でインスリンを打つ人のためにこさえたんだ。毎日注射をしていると皮膚が硬くなって針が入らなくなる。痛いのだってつらいだろ。それをなんとかしたいと話を持ってこられたのが始まりさ。うちの針は元のところが太くて、先がうんと細くなってるだろう。こういう針は世界中どこにもないんだよ。設計したのはテルモ

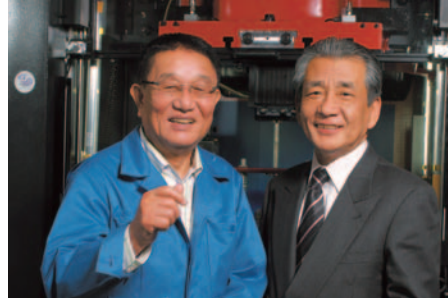
の若い社員だったけどね。金型屋さん、プレス屋さん、パイプ屋さんを一〇〇軒以上回ったけど、断られて悩んだ。うちの評判は聞いていたらしいんだよ、だけど来る勇気がなかったの。なんでかというところ、「岡野というのは野蛮人だ、おまえなんて一人でお願ひしますなんて行ったら、玄関でぶん殴られて帰ってくることになる」と言われてたんだな（笑）。ひでえだろ。

だけどまあ、来たわけだ。で、図面見た途端に「これはできないことないよ、できるよ」と言ったもんだから、やつこさん、びっくりしてね。これまで世界ナンバーワンといわれていたアメリカのメーカーが、今リコールで大変なの。全体が細い針だと詰まっちゃって液が出ないんだって。だけどうちで作った針は元が太くて先が細いだろう。これは流体力学とやらで

おかの・まさゆき●昭和8年、東京墨田区生まれ。向島更正国民学校卒。実家の金型工場を手伝うかたわら、30代になると量産のためのプラントを開発して売るようになる。1972年に父親から家業を継ぎ、岡野工業株式会社を設立。代表社員を名乗る。2004年、旭日双光章を受章。テルモから依頼されたインスリン用注射針「ナノパス33」で2005年度グッドデザイン大賞を受賞。著書に『俺が、つくる！』『あしたの発想学』など。



工場内で談笑する岡野代表とインタビュアーの日本銀行情報サービス局長・湯本崇雄。



言えば、少しの圧力でもスムーズに液が流れるんだって。それを俺は従来とは違う板を丸めて作る方法で加工したんだ。

そのときヤツがこんな話をしてくれた。テルモは今、日本でナンバーワンだ。だけど、この針を開発できたらナンバーワンになれるって。ほら、俺も日本人で判官びいきだからさ、力が入っちゃうわけだ。そしたら株価も上がったよ。開発前一六〇〇円だったのが、今じゃ四八〇〇円。その男には「俺が役員にしてやる」って言ってるんだ(笑)。

だけど、この針は以前のものに比べると高価で病院の利幅が薄い。患者さんは医者の方箋がないと針は買えないのに、処方箋に書いてくれないんだよ。ひでえ話だろ。こっちの針ならずっと楽なのに……。結局人の痛みなんて、一〇〇年だって我慢できるってことだな。

俺は企業を普通の人とは別の角度から見ているだろう？ だからいろんなことが見えるんだよ。ある有名なメーカーの仕事を長くやってたのに、断ってしまったこ

とがあった。それはなんでかという、前は良かったのに、そのころになると図面を持ってきて「幾らでやれるか？」ってことしか言わなくなったからだ。そういう会社の仕事は、俺はやりたかねえ。もう絶対その仕事はやらねえと断っちゃった。それから一〇年ぐらいしてからかな。「あの会社は三年後には赤字になるからな」って予言したの。みんな信じなかったけど、俺の言葉は当たったんだよ。だってろくな経営をしてなかったからな。

——組織が硬くなってしまうん

修学旅行生に岡野流の教育を実践

——小さな頃からの教育も大切でしょうね。岡野代表は修学旅行生を見学に受け入れていると

うかがいました。

岡野 申し込みはたくさんあるけど俺も忙しいから年間一〇校、それも中学校だけ。それ以降になると硬くなっちゃって間に合わない。人間二〇年あればなんとかやるけど、高校に行った後だと間に合わなくなるから。

でしょうね。

岡野 優等生だから。俺たちみたいなのはみ出した人間は、羊の仲間に入らないわけだよ。群れから飛び出ればライオンだっている、食われるかもしれないから身を守る努力だつてしなきゃいけない。

はみ出した人間はいつの時代にも、どんな会社にもいると思うよ。飛び出せばいいんだけど、そこから出らんない。怖いから、みんなと一緒に走っているわけ。だからろくなものができなくなるんだ。

大体うちに希望してくるような

子はちよつと変わってるんだ。不登校の子も入ってる。だけど感性はいいよ。うちの仕事を見せて話を聞かせると、目が生き生きとしてくるよ。それで、みんな学校が嫌いだな。俺の本には最初に「学校が嫌いだった」と書いてあるから、そこに共感するらしいんだ(笑)。

だけど、俺はちゃんと言うんだ

よ。おまえらは豊かな時代に育っているんだから高校ぐらい出たほうがいい。国語や数学は適当でいいけど、英語はちゃんとやれ。これから外国人がたくさん日本に入ってくるんだから、会話ができないヤダメだつてね。俺の話を聞くと帰ってから意欲が出て、高校にも進もうと言い出すらしくて、親から感謝の手紙やファクスがどっさり来るんだよ。

——岡野工業さんがここまで成長した陰には、おそらく奥さんの貢献も大きかったのでは？

岡野 女房はもともとここからすぐの所で生まれ育った人間でね。え、見合いかつて？ とんでもない、恋愛結婚だよ。俺は学歴はないけど、あつちは優等生で跡見学園短期大出身だ。だもんだから、近所のやつらときたらみんな「岡野工業がここまで成功したのは奥さんのおかげだ」なんて言いやがる。まったく、おもしろくもねえ(笑)。

——元氣の出るお話をたくさん、ありがとうございます。

聞き手／日本銀行情報サービス局長

湯本崇雄